

《参考》 調査結果の概観

《参考》 調査結果の概観

ここでは、生活環境の満足度（問3）を取りあげて、多変量解析により区民の回答結果の特徴を明らかにしていく。分析方法は以下の通りである。

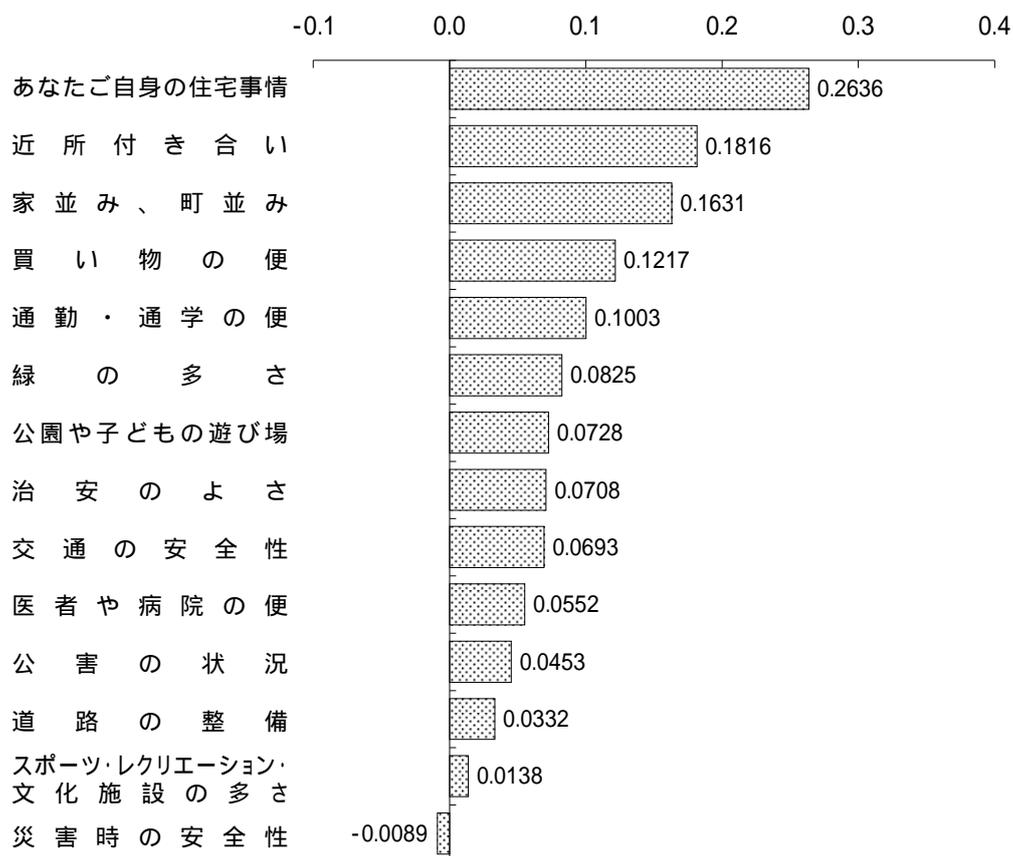
- 1 生活環境評価（全体としての「暮らしやすさ」）と生活環境個別評価の14項目との間にどのような関係があるかを偏相関係数の算出により分析する。
- 2 生活環境個別評価の項目群は、大きく分類するとどのような共通の要素（因子）から成り立っているのかを因子分析により把握する。
- 3 2の分析により抽出した各因子は、生活環境評価（全体としての「暮らしやすさ」）の形成にどの程度寄与しているのかを重回帰分析を用いて算出する。

1 生活環境の個別評価と「全体としての『暮らしやすさ』」の関係

問3の生活環境の満足度から、生活環境の個別評価と「全体としての『暮らしやすさ』」との相関関係についてみるために偏相関係数を算出した。偏相関係数とは、2つの項目（ここでは生活環境の個別評価それぞれと「全体としての『暮らしやすさ』」）の純粋な相関関係を表すものであり、その関係の大きさは絶対値で示される。

これで見ると、「全体としての『暮らしやすさ』」の評価との相関は、「あなたご自身の住宅事情」が最も高く、次いで「近所付き合い」、「家並み、町並み」、「買い物の便」、「通勤・通学の便」などの順になっている。この傾向をみると、自宅や自宅周辺での生活の利便性や環境、近所付き合いなどの身の回りの生活環境が、「全体としての『暮らしやすさ』」の評価とのつながりが強いといえる。

[各項目と「全体としての『暮らしやすさ』」との相関]

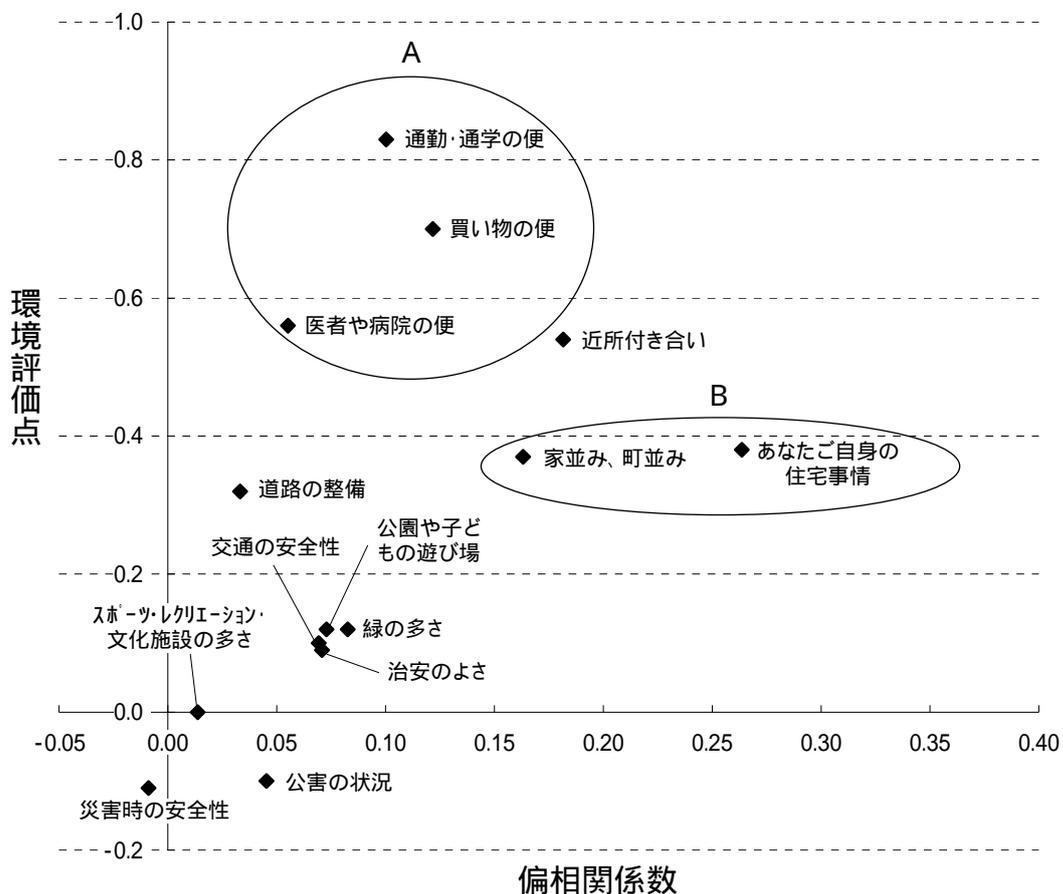


これを、問3で算出した環境評価点との関係でみる。下の図は縦軸に環境評価点、横軸に偏相関係数を取り、14項目の指標をプロットしたものである。

環境評価点が高く偏相関係数の低いもの（Aグループ）は、現状への満足度が高いため「全体としての『暮らしやすさ』」の評価に対する寄与度が低く、逆に、評価点が低く偏相関係数が高いもの（Bグループ）は、「全体としての『暮らしやすさ』」を高める観点から今後の改善点となる項目といえる。

Aグループにある「買い物の便」、「通勤・通学の便」、「医者や病院の便」といった利便性に関する項目は、評価が高いため全体との相関が低いとみられ、Bグループにある「あなたご自身の住宅事情」、「家並み、町並み」は今後の課題になるとみられる。

[環境評価点と偏相関係数との関係]



2 生活環境の個別評価を構成する要素

生活環境の個別評価 14 項目を大きくまとめると、どのような共通の要素から成り立っているかを把握するために因子分析を行った。因子分析を行った結果、3つの因子を抽出することができた。

下の表は、抽出された因子とその因子負荷量を表している。

因子1は、「公害の状況」、「災害時の安全性」、「治安のよさ」、「交通の安全性」の相関が特に大きくなっている。これらの項目は公害対策、災害対策、防犯対策、交通安全対策などというところに共通性がみられる。よって、因子1は“安全性”と名付けることができる。同様に各因子について相関の大きい項目をみていくと、“安全性”“利便性”“地域コミュニケーション”という3つの要素に置き換えてとらえることができる。

[生活環境評価項目の因子分析結果]

生活環境評価項目	因子1	因子2	因子3
緑の多さ	0.3642	0.0080	0.1601
道路の整備	0.3089	0.1222	0.1033
公園や子どもの遊び場	0.2089	0.0993	0.1385
通勤・通学の便	0.0985	0.4275	0.2168
買い物の便	0.0666	0.9114	0.0487
家並み、町並み	0.4585	0.2204	0.2184
交通の安全性	0.5761	0.1678	0.1930
災害時の安全性	0.5960	0.0647	0.1995
公害の状況	0.7100	0.0521	0.1606
治安のよさ	0.5840	0.0349	0.1732
医者や病院の便	0.2291	0.2639	0.2049
スポーツ・レクリエーション・文化施設の多さ	0.1735	0.1605	0.2229
あなたご自身の住宅事情	0.2136	0.0910	0.5230
近所付き合い	0.1656	0.0975	0.4504

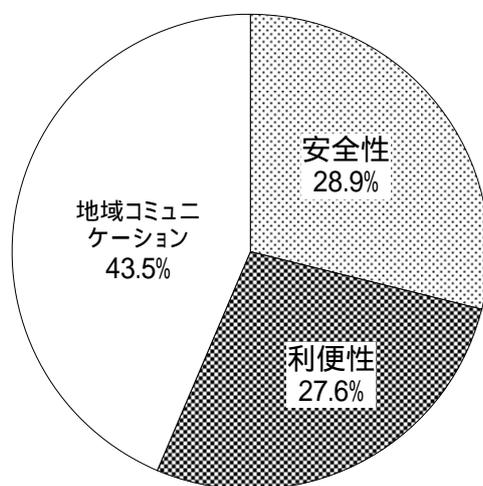
安全性	利便性	地域コミュニケーション
-----	-----	-------------

: 因子負荷量の絶対値 0.4 以上

3 各因子が生活環境評価を形成する影響度

前項で得られた“安全性”“利便性”“地域コミュニケーション”の因子が生活環境評価（全体としての「暮らしやすさ」）を形成するのにどの程度寄与しているかを把握するため、重回帰分析を行い寄与率を算出した。重回帰分析では、寄与率を算出することにより項目間の関係の大きさを割合でとらえることができる。その結果、生活環境評価（全体としての「暮らしやすさ」）の形成に最も影響が大きいのは「地域コミュニケーション」で、寄与率は43.5%である。次いで「安全性」（28.9%）、「利便性」（27.6%）の順となっている。

[各因子と生活環境評価の関係の大きさ]



寄与率は、各因子の標準偏回帰係数の総和を 100%として算出している。